

宮崎海岸侵食対策検討委員会 第10回効果検証分科会 議事概要

令和3年10月6日(水)～7日(木)

今回の効果検証分科会は、新型コロナウイルス感染症への対策を踏まえ、一堂に会する方法はとらずにweb方式で各委員へ個別に説明し、全員から意見を求める方法で実施した。

[開催状況]

- 10月6日(水) 堤委員
柴田委員
西委員
- 10月7日(木) 村上委員
中村委員
須田委員(分科会長)

- [報告事項] 1. 昨年度に実施した効果検証の振り返り
2. 令和元年度、令和2年度の侵食対策実施状況および今年度の予定
3. 昨年度分科会以降の市民談義所等の開催概要・意見

- [検討事項] 4. 今年度の効果検証(案)
5. 今年度後期以降の調査実施計画(案)
6. その他

市民談義所の意見【市民連携コーディネーターの統括コメント】

今回の市民談義所は、新型コロナウイルス感染症への対策を踏まえ、会議形式での開催は中止することとした。そのかわりに、希望者全員に資料を送付し、発言の意思のある方にQ&A形式の意見提出用紙にて参加・発言してもらうことにした。さらに意見を直接電話で伝えられるホットラインも準備した。

多くの市民が懸念していたのは、突堤の早期の延伸についてである。養浜についてはおおむね事業主体の評価と市民意見との間に大きな違いはないものの、突堤が延伸されていない現状から、養浜した砂が台風などで流出し、砂浜が安定的に回復していない状況を危惧する意見があがっている。そのため、突堤延伸に向けた漁業者との話し合いの進捗に関心を抱いている意見が多くみられた。

また、事業の遅れを心配する市民からは、他の工法についても検討を始めるべきという声があがった。

埋設護岸については、ほとんどの市民がその効果を実感しており、アカウミガメの産卵増加などの結果を評価する声もあがっている。

計画の前提となる諸条件については、すべての市民意見として「問題ない」と

いう結果であった。いくつかのコメントは、最近のデータをもとに前提条件と照らし合わせることで、大きな差異がないかどうかを確認することの必要性を指摘している。

長期的な視点に立った海岸侵食対策として、数名の市民が、養浜だけでなく、川からの土砂供給量を増やすための総合土砂管理の取り組みの必要性について指摘している。養浜による対応の持続可能性についての懸念が背景にあると思われる。

今回の市民意見では複数の人が、将来的な砂浜の「使い方」について理想を語っていた。これまで宮崎海岸侵食対策事業は徹底した市民参加のもとに進められてきた。次のステップとして、談義所や海岸でのイベントなどを通じて、どのようにして海岸を地域の多様な活動の場として位置付けていくかを検討することも今後の重要な課題である。

各委員からの意見

【地形変化について】

- 委員) 現突堤延長及び現状で実施可能な養浜による効果等の評価については異論はない。海岸侵食は、マリーナや宮崎港への堆積という懸念事項にも関連しており、沿岸方向の漂砂を制御する突堤の延伸について、影響を懸念する漁業者との話し合いを進め、早期に再開して欲しい。
- 委員) 岸沖の地形変化について、これまでも生じた移動範囲内であり静穏時に岸向きに移動するだろうことは理解できる。一方、高い波高の発生が続く場合も考えられるため、今回もこれまでと同様に地形が戻るかどうか注視して監視する必要がある。
- 委員) 以前の市民談義所で、過去には多段バーがあった、というような意見を聞いた。地形変化図から、それに似た状況の兆候が伺える。
- 委員) 今年のアカウミガメの調査の際に、大炊田の少し沖側に浅瀬（インナーバー）が見られた。昔よく見た光景だと感じた。

【川砂利・川砂養浜について】

- 委員) 補助突堤②の北側などに砂がついている状況がみられた。まだ砂利が多いためアカウミガメが産卵時に穴を掘るのは難しそうであるが、高鍋のような砂利海岸でも産卵している。早く砂利の上に砂が被さってくれることを期待する。
- 委員) 川砂利・川砂養浜の礫材は自然の材料であり、施工直後の違和感も時間と

ともに馴染んでいくため、景観上の観点からの影響・問題はないと考える。逆に、川砂利を投入せずに砂浜が付かないことのほうが景観上だけでなく問題であると考え。

- 委員) これまで海中土砂の挙動の調査やシミュレーション検討は砂を対象として行ってきた。礫材を対象とした調査、検討は行ってきていないので、川砂利等の挙動調査や検討をしっかりと行って欲しい。

【気候変動の影響について】

- 委員) 気候変動に伴う長期的・将来的な変化は徐々に起こっているのは間違いはない。一方、H30、R2と3年で2度となった大きな外力来襲をもって、直ちに事業単位で設定している目標の前提となる外力を見直す変化とみるかはまだ判断できないだろうと思う。

- 委員) 直ちに前提条件を見直す段階とは言えないという評価については異論はないが、最大波高だけを見れば、経年変化が右肩上がりであることは認識しておくべきである。

【総合土砂管理、サンドバイパスについて】

- 委員) 一ツ瀬川河口周辺の地形変化図を見ると、河口沖合が堆積傾向の色になっており、一ツ瀬川北側から回り込んでいる可能性が示唆される。

- 委員) 一ツ瀬川河口付近で実施しているサンドバイパスの試験施工を拡充する方向で進めて欲しい。

【アカウミガメについて】

- 委員) 昨年のアカウミガメの産卵の傾向は全国的な傾向と同様で、一昨年から増加した。今年については、動物園東だけでなく、大炊田の方でもサンドバックと前面の砂浜に段差が多く見られ、サンドバックの上まであがれなかったカメがいたようである。これまでもスロープを作るなどの工夫がなされているが、引き続き対応をお願いしたい。

【景観（突堤）について】

- 委員) 現状で突堤のエイジングも十分に進んでおり、周囲に馴染んでいると考えられる。

※上記の各委員の意見を分科会長に提示し、今年度の効果検証(案)および今年度後期以降の調査実施計画(案)について総括して頂いた。

【分科会長の効果検証(案)および調査実施計画(案)総括】

「計画検討の前提条件」および「養浜」、「突堤」、「埋設護岸(サンドバック)」の評価素案について、効果や今後の方向性等について確認し、各対策工を継続することが妥当であると評価した。また、今年度後期以降の調査実施計画についても素案通り実施することが妥当である。

一方、市民の回答を見ると、事業や個々の対策についての理解を概ね得られているようであるが、さらなる理解を深めるためには、宮崎海岸の侵食対策が3つの工法を組み合わせることにより効果を発揮するものだというのを、改めて市民に伝える必要があると感じた。

また、川砂利を用いた養浜を実施することの意味について、市民に丁寧に説明すべきだと思う。ややもすると、河口に溜まった建設残土のような不要物を利用するのではないかという「負」のイメージを抱かせるかもしれないので、決してそうではなく、自然の作用で河口域に溜まった土砂を「有効利用」するものだという理解が得られるよう工夫する必要がある。

整備した設備については、市民はそのままあり続けると思ってしまう傾向もあるため、常に維持管理することで最大限効果を上げられるということを説明することが必要だと思う。市民目線に立って、丁寧に説明することが重要であると考えている。

気候変動の影響に対する意見が出ていたが、全国的・全県的な動向に注視して進めていくことは重要である。市民に対しても、気候変動に伴う長期的な見方、事業単位の短期的な傾向の見方を解りやすく市民に説明することが重要である。

以上